

[優秀賞]

富橋 芙美さん（秋田市）レビュー

書評対象図書

安藤 祐介 著

『本のエンドロール』（講談社文庫）

エンドロールのその向こう

今、手元にある本の奥付を開いてみてほしい。タイトルや発行日、著者名、発行所などの後、大半の人に意識されず、それでも確かに記されているのが印刷会社だ。

浦本学は印刷会社「豊澄印刷」の営業担当として、良い本を作るべく仕事に勤しんでいる。しかし、その情熱はいささか空回り気味だ。就職説明会で「印刷会社はメーカーだ」と熱弁したところ先輩の仲井戸に一蹴され、取引先の要求に応えようと現場に調整を頼んだところ同期の野末に「伝書鳩だ」と揶揄されてしまう。そして現実は厳しく、製本後に誤字が発覚したり、巨匠デザイナーや大御所作家が無茶を求めてきたりと、トラブルが尽きない。しかし、それらを乗り越える度に、印刷営業として成長し、周りの意識も少しづつ変えていく。

締切に追われる作家や、作家に振り回される編集者に焦点を当てた作品は多々あるが、印刷会社を題材にするのはなかなか珍しい。この作品では、校正や原稿の流し込み、紙の素材や特殊加工、印刷など、作家が書き終えてから本になるまでの過程を知ることができ、それだけでも本好きにはぜひ読んでほしい理由になる。印刷工程においては特に詳細だ。通常の四色のインキでは表現しきれない「特色」と呼ばれる色を職人がインキを練り上げて作っていること。紙は水分を含んでいるため天気や湿度で状態が変わり、その変化にインキの量や印刷機の設定を合わせないといけないこと。

「印刷」という仕事の裏側に触れるにつれ、思わず棚にある本を取り、紙質や表紙の色、加工を確かめたくなる。特色職人のジロさんや機械のメンテナンスに余念がないキュウさん、堅実な仕事ぶりの野末が頼もしい。

「印刷会社はメーカーだ」、「夢は毎日の仕事を手違ひなく終わらせること」、「印刷会社は本の助産師のようなもの」、「給料に見合った責任を果たすだけ」……。登場人物が抱く仕事観はそれぞれ異なる。また、作中では、手作業と機械、紙の本と電子書籍、営業と現場、作家と編集者といった対立構造も見られる。しかし、全員の根底にあるのは「良い本を作りたい」という本への愛だ。本はたくさんの人と人、人と機械が一体となって作られるものだということを痛感する。そして同時に、読んだ人はきっと自分の仕事に置き換えて考えることだろう。一人で完成する仕事はない。誰もがきっと、本の奥付=エンドロールの文字の向こうに名前が刻まれているはずだ。